

6. 市場経済と資本主義 —さまざまな市場経済観—

1. ポランニーの市場経済観
2. ヒックスの市場経済観
3. 岩井克人の市場経済観
4. ブローデルの市場経済観

1. さまざまな市場経済観

ポランニーの市場経済観

- ポランニーは、現代の経済社会が市場経済のもとに成り立っており、近代経済学はそれを分析するのに有効な手段であることを認めつつも、その(市場経済)理論を超歴史的に適用し、歴史上のすべての経済制度をそれでもって説明する誤りを繰り返し批判した。
- とりわけ重要なのは、市場経済万能主義を批判するなかで、かれが市場経済の三要素として、交易、貨幣、市場を取り上げ、そのトートロジ的性格を、カトリックの三位一体の教義に比して、指摘したことである。つまり、定義において、交易と貨幣の二つの要素は市場という要素に従属させられており、交易は市場における財の移動であり、貨幣はそれを助ける交換手段だということである。
- しかし、歴史の現実においては、交換の形態やさまざまな貨幣使用は市場の成立とは関係なく、むしろそれに先立って、われわれの経済生活のなかで重要になってくる。つまり、交易と貨幣は常にわれわれの世界に存しているとも言えるかもしれないが、市場はそうではない。市場はもっと後の世の発展物である。ここで市場とは、需要・供給の価格メカニズムを含む、交換の機構という意味である。

ヒックスの市場経済観

- ヒックスにとって市場は、ポランニーがそれを超歴史的なプライス・メカニズムと考えるのに対して、歴史的に形成されるひとつの制度である。かれは経済史を市場の形成と発展の歴史として捉え、その出発点である**市場の勃興を、みずからは生産に従事せず、ものとサービスの交換を仲介することによって利益をえる専門家集団、つまり商人の発生にみている。**
- つまり、ヒックスによる**市場経済とは、商人を媒介とした交換経済のことであり、この商人的経済のなかで、商人によって媒介される個々の取引の集積として市場が形成されることになる。**
- この市場の発展について、ヒックスが強調するのは、**制度的要因、それも必ずしも市場や経済と直接には関係のない制度的要因**である。そもそも、ヒックスにとっての市場とは、商人によって媒介される個々の取引の集積にほかならないが、**個々の取引そのものが、「財産の保護」や「契約の保護」という法の整備を必要とする。**
- そして、この発展の延長線上に産業革命による近代工業が勃興し、市場の歴史において新たな時代が画されることになる。それをもたらした制度的な背景は、**株式会社に代表される「有限責任会社」制度がもたらした巨大な信用の創造**である。

岩井克人の市場経済観

- 岩井にとって、市場経済と資本主義は同義である。そのうえで、岩井は資本主義の利潤創出原理を、二つの価値システムの間には不可避的に存在する「差異」に求める。その論理は単純明快である。そこで議論されているのは、あくまでも抽象的な関係のなかでの「差異」であって、そこに経済の実態が入る余地はまったくない。そのなかで、労働価値説に代表される、利潤の源泉を労働する主体としての人間にみる人間中心主義の「経済学」原理が批判される。
- 岩井は労働価値説を、産業革命以後の産業資本主義を擁護するイデオロギーであるとして、その虚構性を暴く。つまり、産業資本主義であっても、その利潤の源泉は、人間が投下する労働の価値という実態にあるのではなく、生産手段を奪われた労働者の労働力の価値とかれらの労働の生産物の価値との間に存在する抽象的な格差にある。
- この点において、その利潤創出原理において、従来、前近代的な資本主義形態とされてきたヴェニス商人の商業資本主義と変わりはない。なぜならば、商業資本主義の利潤創出は、空間的に離れた二つの地点間に存在する価格格差、つまり人間の労働という実体とは無関係な、二つの地点の物価体系(価値システム)間の抽象的な「差異」に基づかせているからである。

ブローデルの市場経済観(1)

- フェルナン・ブローデルは、岩井とは対照的に、市場経済と資本主義とを区別し、資本主義の歴史的な性格を強調した。かれは、その大著『物質文明・経済・資本主義』の中で、15世紀から18世紀の経済生活を、「物質文明」「市場経済」「資本主義」の三層構造として描いた。
- このうち、**市場経済**は「物質文明」と「資本主義」には含まれた層であるが、ブローデルにとって、それは、近代経済学の研究テーマである**需要・供給の価格メカニズム**である。つまり、交換経済の世界、それも合理的な計算をする多数の経済主体と、財やサービスの需給の不均衡を速やかに解消する価格メカニズムから成り立つ完全競争の世界である。かれはこの世界を「透明な世界」と呼んでいる。

ブローデルの市場経済観(2)

- もっとも、現実の経済生活は、このような「透明な世界」ではありえない。それは、市場経済の上下に展開している、ともに不透明な世界のなかでしか、あるいはそれらとの関係のなかでしか、営まれえないからである。下の世界とは、物質文明あるいは物質生活であり、上の世界とは、資本主義の営みである。
- 資本主義は選択と変革のための力にあふれる世界である。しかし、それ自体で自立しうるのではなく、物質文明と市場経済あつての世界である。こうして、市場経済と資本主義をほぼ同義と考えるポランニーとは対照的に、ブローデルは市場経済と資本主義を峻別し、近代資本主義についても、それを地中海世界での市場経済のノウハウがアルプスの北に移植され、そこでの環境に応じて発展した歴史的形成物と考えられている。

市場経済と資本主義

フェルナン・ブローデル『物質文明・経済・資本主義』

経済＝市場経済

- その意味するところは、農村活動・屋台店・工房ないしは作業場・商店・取引所・銀行・大市〔foires〕、そして当然ながら市〔marches〕と結びついた、生産および交換のメカニズムということである。まさしくこれらの明瞭で《透明》でさえある現実にもとづいて、またそれらの現実を生動せしめていた把握しやすい過程にもとづいて、経済学を構成する言説が創始されたのである。このようにして経済学は、早くも出発点において、ほかのもろもろの光景を排除しつつ、とくに恵まれたひとつの光景〔ヨーロッパの市場経済〕のなかに閉じこもったのである。

物質文明

- 物質文明とは、交換とは無縁な生活の総称であり、自給自足性、貨幣的交換の不在、狭小な経済活動、顔見知りの間の人間関係、しきたりや習慣の支配、なかば無意識的な日常性、ゆったりとした時間の流れ、変化の不在、自然や大地との距離の近さ、などを特徴とする。

資本主義

- 資本主義は、変転きわまりない現代の市場社会の別称であり、視界や活動領域の広大さ、時間の慌ただしい流れ、そのうえにある物質文明と市場経済の拘束を嫌い打ち破る「力」、過去よりは未来を好み、貨幣的富というよりは変化とリスクと冒険を好む性向、などを特徴とする。
- 交換の基礎を、たがいに求め合う需要におくのと同程度あるいはそれ以上に、力関係におく権力の蓄積であり、避けられぬものか否かは別として、他に多くあるのと同様な一つの社会的寄生物なのである。